
巻頭言

「伝統の技と未来社会」



公益社団法人 日本防犯設備協会 常任理事 鈴木 一三
(綜合警備保障株式会社 開発企画部長兼商品サービス企画部長)

私は、有明海沿岸の小さな田舎町の出身です。

幼い頃はよく干潟で貝や小魚などを取って遊んでいました。

有明海といえば海苔とムツゴロウ。特にムツゴロウはこの海のシンボルで、蒲焼がお勧めですが、甘辛く少し苦味もあって日本酒に合う珍味です。

このムツゴロウは実は絶滅危惧種で、1980年代後半にはほとんど獲れなくなり、地元の食卓からも姿を消しつつあったのですが、禁漁期間や保護水域の設定など関係者の大変な努力により、現在はなんとか漁獲高も回復してきました。

さて、ムツゴロウを獲るのに用いられるのは、かぎ針で引っ掛ける「むつかけ」という伝統の漁法です。干潮時に潟スキーという板に乗って、5メートルもある竿を操り、10メートルほど先にいるムツゴロウを狙います。そもそも干潟はぬかるみが深く、足が取られると命にかかわる事故になることもあるため、潟スキーという板を敷き、干潟の上を滑らせて進みながら漁をするのですが、この操作が簡単ではありません。一見情趣的な光景ですが、長い竿、針掛けにも高い技術を必要とする難しい漁です。



私が小学生の頃は、このむつかけ漁師をよく見かけました。しかし高齢化が進み、現在は5、6名しかいないそうで、彼らもまた高齢となって漁に出られなくなってきてています。昔から引き継がれている伝統漁法が、時代とともに衰退していくのはとても寂しいことです。

そんな中、若い人たちがむつかけ漁師に弟子入りをし、大切な伝統を守り続けていこうという声が出てきました。テクノロジーが進化した今なお、この漁法を地域に根ざした生活文化、技能として残していくたいという彼らの気持ちは、大変立派で頼もしくも感じます。

同様に、日本には昔から受け継がれているいくつものすばらしい技能や技法があります。どれも先人の知恵と色々な技術的工夫が詰まっています。また、沢山の失敗のうえに築き上げられた財産であり、厳しい修行を積んだその道の「名人」とともに伝承されてきました。

一方、現代社会において産業や社会生活を支える技術革新のスピードは目ざましく、いまやIoT・ビッグデータ・AI・ロボット・5G等の最先端技術を導入していく動きが活発化し、その先には遠からず超スマート社会の実現も予想されています。また、テロや地政学リスク、2020年東京五輪、2千万人超の訪日外国人観光客といった内外情勢の変化、加えて深刻な人手不足、働き方改革など、経営環境の変化にも対応していく事業形態、働き方が求められています。

セキュリティの世界も例外ではなく、機器・システム・手法などあらゆる側面から、幅広い領域での付加価値の高いサービスを創出し、効率的な運用策を構築していくなくてはなりません。

近年の刑法犯認知件数の減少、とりわけ窃盗犯の大規模減少は、さまざまな知恵と工夫が詰まっている防犯設備の開発やその普及と無縁ではなく、われわれ日本防犯設備協会の多年の活動の成果でもあります。

むつかけ漁の趣とは異なりますが、この先ますます進化する防犯設備の世界において、セキュリティのプロたちが培ってきた数多の経験、ノウハウをさまざまな「安心、安全」に変えていくための活動を、皆さんと一緒に推進していくたいと思います。